カラー
27 INTERVIEW
吉田　都さん
（バレエダンサー）

生涯学習の総合情報誌
マナビィ
2007年
7月号
No.73
文部科学省編集

contents

特集

あなたの夢への第一歩！
―高等学校卒業程度認定試験―

④ 座談会
再チャレンジへの第一歩！
〈劇作家、演出家、大阪大学教授　平田オリザ　他〉

⑧ 調査結果
「高等学校卒業程度認定試験」合格者の進路状況調査の結果について
〈文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課認定試験第一係〉

⑫ 施策説明①
高等学校卒業程度認定試験について
〈文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課認定試験第二係〉

⑮ 施策説明②
矯正施設（刑事施設、少年院）における高等学校卒業程度認定試験の実施について
〈法務省矯正局成人矯正課〉

連載

⑯ まなびの新風――あのまち・このまち
小平発 地域で育てようすこやかな子ども　〈まなびのまち東京都小平市〉

⑳ 団塊世代による地域づくり
あなたのセカンドステージを応援します　〈堺市セカンドステージ応援団運営協議会〉

㉔ マナビィと行く全国28の家
自ら決断し挑戦すること　〈独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家〉

㉛ 子育てするならわがまちで
子育てをもっと楽しむために、親子で学べる場・仲間作りの場を創る
〈NPO法人子育てサポーター・チャオ〉

㉜ 子育てするならわがまちで
子どもづくりは大人づくり　〈加須南小地域おやじの会〉

㉞ 事例クローズアップ
まちで学び、まちを育てる、コミュニティスペースの学生たち　〈大阪人間科学大学〉

㊳ 事例クローズアップ
今、出来ることを出来るところから　〈ビッグ・フィールド大野隊〉

㊷ 挑戦！企業が取り組む生涯学習
テレビゲームを教材に　〈株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント〉

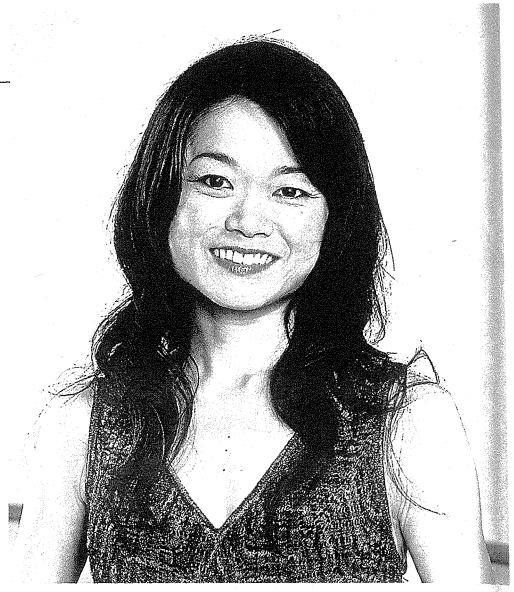
45 まなびピア岡山2007④
46 都道府県ニュース
48 突撃レポート（NPO法人 キャリナビ）
49 Manabee News
53 教えてマナビィ
54 編集後記『笑凱愕凱』

表紙・インタビュー撮影
酒井吉温

INTERVIEW
私の生涯学習

夢を追いかけて

英国最高峰のロイヤル・バレエ団で
プリンシパルを務め、
世界を舞台に活躍中の吉田都さん。
そんな吉田さんがバレエを始めたきっかけや
海外でご活躍されるまでのご苦労、
そして今の若者に伝えたいメッセージについて、
お話を伺いました。



バレエダンサー
吉田　都さん

バレエとの出会い・コンクールへの挑戦

――本格的にバレエを習い始められたのは小学校三年生からだそうですね。

一番初めに踊りを習いたいと思ったのは幼稚園のときだったんですよ。で、母を説得して、小学校一年生のときから近くのお遊戯教室みたいなところに通ったんです。ですから、踊りのようなものは少し前からやっていたんですね。バレエ学校は、どうしてもトゥシューズを履きたかったのです。バーにつかまってやるおけいこもやりたかったので、母に頼んで通わせてもらえるようになりました。

――厳しいことで有名なローザンヌ国際バレエコンクールにトライされたきっかけは。

通っていたバレエ学校の先生に勧めていただいたんです。また、他にもバレエコンクールはたくさんありますが、たいてい何かしらの賞があって、それっきりで終わってしまうんですね。でも、ローザンヌ国際バレエコンクールというのは、受賞すればその後に留学があるというほんとに若者向けのコンクールですので、私自身も興味があったんです。もっとも私の場合は、「経験のためにお願いします」という感じで参加したのですけどね。世界中から集まってきた人たちと一緒におけいこするということだけでも違いますから。

――その厳しいコンクールでスカラシップ賞を受賞されていますよね。自信はありましたか。

賞をとりにいこうという気持ちも自信もなかったんです。とにかく自分のベストをつくせればいいな、とか、経験のためとか、そんな思いでいました。ただ、そういうコンクールに出るとなると、一つの作品に取り組むことができるんですね。普段はおけいこだけなのに、ちゃんとソロを踊れたりとか、リハーサルができたりとか、そういう過程が私にとってはすごく勉強になってよかったんです。

それで、実際にスカラシップ賞をいただいて、正直びっくりしま

したね、戸惑いがあったというか。でも、あのコンクールは楽しいといったら変なんですけれども、ワクワクする経験がいっぱいありました。一緒に行った日本人のダンサーにもすごく刺激を受けましたし、様々な国の仲間と会えて楽しかったという思い出があります。

世界中を舞台にして

——スカラシップ賞を得て留学する際に、イギリスのロイヤル・バレエ・スクールを選ばれたのはどうしてですか。

私の先生がロイヤル系の方だったんですね。それでロイヤル・バレエ団のバレリーナの方と一緒にお仕事をされていてよく存知あげていたというのもありますし、その当時在籍していたバレエ学校のバレエ団自体が、わりとロイヤルスタイルだったんです。そういった点からの憧れもありましたね。

——留学された当初は、悩みや不安もあったかと思いますが。

日本人はその当時、ほんとにクラスに一人だけで、言葉もわからなかったし、食べ物も合わなかったですし、初めて家から離れるのでホームシックにもかかりました。最初の一年は——もちろんすごくワクワクする経験もあったんですけれど——ほんとに大変で、メンタル面でも暗かったですね。

特に言葉については、当日のスケジュールも良く分からない状態なんですよ。初日にバレエ学校に行ったときにはどのスタジオに行っていいかさえ、わからなかったですし。ほんとに何が何だかわけがわからず、あっちのスタジオに行ったりこっちのスタジオに行ったりという感じでした。

——スカラシップ賞をとって来ているということで、周りからプレッシャーをかけられたりとかはありませんでしたか。

それすらもわからなかったのかもしれないんですけど（笑）。外国人が私一人だったということもありますし、幼く見えたのかもしれませんが、みんなよく面倒を見てくれたんですよ。例えば「ウィークエンドはどうするの？」とか、「今日はうちに来る？」と、家に招待してくれたり、友人のパーティーにまぜてくれたりしてくれました。最初からフレンドリーという感じではないんですけど、ポイントポイントで声をかけてくれるんです。言葉はわからなくてもみんな優しかったという覚えがありますね。

また、私は最終学年に編入したのですが、すごくストレスの多い学年なんですよね。卒業後は、仕事をとらなきゃいけないという学年なので、みんなピリピリしていたんです。だから、私のことをどうこうというより、みんな自分自身のことで精一杯だったのではないでしょうか。実際、その年に一緒にバレエ団に入れた人は多かったんですけれども、でもやっぱり入れなかった人もいて、海外のバレエ団に行った人もいました。

——その後、周りから見るとすんなりプリンシパルに昇格されますが。

四年くらいでしょうか。プリンシパルにはわりとトントンと、自分でもよくわかっていないうちに上げてもらいました。

私が「東洋的」という評価をいただいていることについては、今は「違うからいいんだ」と思えるようにはなりましたが、やっぱりバレエとなると、日本人は向いていないんじゃないかなという思いがすごくありました。最初に渡ったときはイギリス人になろうとしていたので、すごく無理をしていたんです。でも、今は「自分は自分」と気持ちの中でも割り切れるようになったので、そういう評価をしていただけるのは嬉しく思います。自分の中の日本人の部分がすごく出ているのかなと。イギリスのいいところは、一人一人違って当たり前というところからスタートするんですね。もちろん意見も違って当たり前、踊りも違って当たり前。それで私も受け入れてもらえたんだなと思います。

——海外から見て日本のバレエはいかがですか。

もちろんダンサーたちのレベルはほんとに高いですし、特に今の若い人は体型も引けをとらないですし。

また、バレエといったら、コールドバレエ（群舞）というのが有名ですが、日本のバレエ団というのはびしっとそろっていますよね。ロイヤルではあり得ないというか、いくら時間をかけてリハーサルをしたとしても、日本人のようにびしっと列も合ってすべてきれいに、とはならないような気がします。でも逆に、イギリス的な、「機械じゃないんだから、そんなにびしっと合わなくても（いいじゃない）、人間が踊っているんだから」という考えも納得できるんです。だからどちらがいいかというのは言えませんね。

でもダンサーの社会的な地位を考えると、日本というのは難しいなと思います。収入ばかりでなく、職業として認められていないのではないかなとすら思えます。この辺はダンサーの意識にもかかわりますし、プライドを持たないといけないなって思います。一方、ロイヤル・バレエ団のダンサーというのはプロとしての厳しい世界で活動しています。だからこそプロになって、バレエ団に入って踊っているプライドの高さもすごいです。

——活動の場はまだまだロンドンでもあると思いますが、日本に移されたのは何故ですか。

日本人として、日本のお客さんの前で踊りたかったんです。イギリスでももちろん応援していただきましたが、家族や友人が見にきているのを見ると、うらやましいなと思っていました。何年住んでいても外国人は外国人なんですね。ですから、日本に帰ってきて、家族や友人を含めて日本人のお客さんの前で踊れるというのは、私にとっては特別なことなんです。現在所属しているKバレエカンパニーは東京や大阪だけでなく地方公演もしますから、こういった感じで全国を回れて、多くの人の前で踊れるのはすごく嬉しいですね。

子どもたちや若者へのメッセージ

——学校やバレエ教室に指導者として足を運ばれることもあり

ますか。

はい。最近こそなかなかできていないのですが、将来的にはそういった機会を増やしていきたいですね。

子どものときに本物に触れるということは大切なんだと思います。私も子どものときに、海外からバレエ団が来るといろいろ見せてもらっていましたけれども、子どものときに見た印象と大人になってからのそれとではインパクトの大きさが全然違うんです。ですから子どもの、まだ心も柔らかいときに見てもらえるのはいいですよね。それで、私の活動が子どもたちにとって何かのきっかけになればと思ってやっています。皆さんの話を聞くと、やはりバレエというのは、機会がないとなかなか劇場まで足を運ぶということはないんですよね。

――「世界の吉田都さん」の踊りを見た子どもたちの反応はどうですか。

みんなちゃんとやってくれないんじゃないかなとか、さめた感じじゃないかなと心配していたのですが、実際はみんなほんとに一生懸命で可愛かったです。また、感想を書いてくれたのを読むと、一言一言ちゃんと聞いてくれていたんだな、というのが伝わってきました。

日本人というのは意外に反応が薄いところがあるんですね。向こうの生徒さんだと何か言ったらまた一言返ってくるというのがありますが、日本人はじっと黙って聞いているので、これ通じているのかな、分かってくれているのかな、という不安があったんです。でも、実際はみんなしっかりと聞いていてくれていて嬉しかったですね。これからも続けていきたいなと思っています。

――ダンサーであると同時に指導者として、「育てたい」という夢はありますか。

教えるのって、自分が学ぶことがすごく多いな、勉強になるなというのがありますね。以前は教えることなんてできないと思っていたんですよ。教えるというのは自分の踊りを棚に上げて言わなければいけないというのがありますよね。自分でできていないのに言っていいのかなというのがありますし。でも、教えたときにそういうことじゃないと感じたんです。今まで私が向こうで経験してきたことを次の世代に伝えるという役目もあると思います。

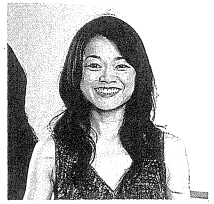
――最後に若者にエールを送ってください。

私は幼稚園のときに自分のやりたいことを見つけられたので、すごくラッキーだったと思います。まずは、自分が何かしたいという「夢」とか「やりたいこと」を見つけてほしいですね。そういうものが一つあることで人生は全然変わってきます。

あと感じるのは、自分が信じる道を思い切って進んで、そこで例えば自分の思うようにいかなかったとしても、失敗とかじゃないんですね。次のステップに行く準備段階であって、その経験は絶対に生かされるんです。失敗からの方が学ぶことは多いですから、できるだけ失敗したほうがいいんですよね。

そうやって、自分でやりたいと思ったことは信じて頑張ってほしいですね。夢を追いかけてほしいです。

（取材・構成／編集部）



よしだ・みやこ
東京都出身。九歳からバレエスクールに通い、一九八三年、ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞を受賞。イギリスのロイヤル・バレエ・スクールに留学後、一九八四年、サドラーズ・ウェルズ・ロイヤル・バレエ団を経て、一九九五年、英国ロイヤル・バレエ団に移籍しプリンシパルとして活躍。二〇〇〇年度、文化庁芸術選奨文部科学大臣賞受賞。二〇〇四年、ユネスコ平和芸術家に任命される。昨年から熊川哲也が芸術監督を務めるKバレエカンパニーに移籍し、主な活躍の場を日本に移している。
Kバレエカンパニー http://www.k-ballet.co.jp

インタビューを終えて

文部科学省
生涯学習政策局長
加茂川幸夫

幼少の頃から「やってみたい」と思ったバレエを自分の意志で習い続け、海外に渡っても言葉や生活習慣の壁を乗り越え、日本を代表するバレエダンサーとしてご活躍中の吉田さん。そのスレンダーで愛らしい容姿からは想像のできない「夢をあきらめない」という強い信念が伝わりました。これからもその優雅なダンスを通じて、私たちに勇気を与え続けて下さい。

月刊
マナビィ

8月号予告

特集
伝統文化の振興と地域の活性化について

まなびの新風―あのまち・このまち―　矢部村の生涯学習の取組（福岡県八女郡矢部村）
団塊世代による地域づくり　シニア学生受入モデル（関西国際大学）
挑戦！企業が取り組む生涯学習　IT時代の図書館ビジネス（株式会社リブネット）

月刊マナビィ 7月号

第73号
2007年7月1日印刷
2007年7月1日発行

著作権所有　文部科学省©
発行所　株式会社 ぎょうせい
本社
〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部
〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
TEL　03-5349-6666（営業部）
URL　http://www.gyosei.co.jp
印刷所　ぎょうせいデジタル株式会社

定価600円　本体571円　〒76円
年間購読料7,200円（税・送料込み）

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にてお願いします。

●本紙掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。
●本誌へのご意見、ご感想、情報などは、メール（chiiki@mext.go.jp）又は添え付けのハガキで是非お寄せください。

広告の問い合わせ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業部広告課
電話 03（5349）6657（ダイヤルイン）

Printed in Japan 2007　ISSN 1346-6593
●この刊行物は再生紙を使用しています。

編集後記 笑凱愕酬

必支

夏の甲子園に向けた地方大会が多くの県で始まりました。「必支」とは、ある伝統校（春夏ともに全国制覇の経験あり）のマネージャーに、代々伝わる合言葉です。「私たちは、チームのみんなを、どんなことがあっても、誰が何と言おうと、必ず支え抜く」。負けたら終わりの過酷なトーナメントの中、重圧と孤独にさいなまれる球児たちにとって、実に頼もしく、心に響く言葉ではないでしょうか。

一方、「必勝」というスローガンはよく見られるところですが、4千校以上が参加し、「必勝」と「必勝」がぶつかり続ける結果、1校を除き、最後は「必敗」で終わります。頂点を極めた1校も、やがては負けるでしょうから、「必勝」は完遂することが不可能な目標と言わざるを得ません。

だからといって、「必勝」を掲げて戦うことを否定するつもりは毛頭ありませんが、「必支」の方は、全てのチームにとって、自分たちだけで達成可能な目標だということです。最後まで仲間を支え、共に戦い抜けばいいのですから。

とはいえ、「必」は、一切の例外を許さない厳しい言葉。人をずっと支え続けることは、決して容易ではありません。それゆえ、「必支」を貫かんとするその高校が、選手や指導者が入れ替わっても強豪であり続けているのだと思います。

もう一つ、「支える」ということについて、最近読んだのが北康利氏の『福沢諭吉　国を支えて国を頼らず』という本。ともすれば「人を頼るが人を支えず」となりがちな中、「独立自尊」の精神を表現したそのタイトルが強く印象に残りました。「必ず」とは中々いかないまでも、「人を支えて人を頼らず」という理想は忘れずにいたいと思います。

（文部科学省生涯学習政策局政策課地域政策室長　御厩祐司）